Alternative Systems Study Bulletin

第20巻第4号

(2012年10月5日)

第３回中日社会主義フォーラムに参加して

当日のレジュメ

ソ連崩壊の原理的根拠と『資本論』初版本文価値形態論の意義

第１章　商品からの貨幣生成の原理

第２章　人格を物象化させるシステムとしての商品

ポストンの「マルクス理論の新地平」

後記

編　集　　境　毅

連絡先　　〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ　http://www.office-ebara.org/

メール　　sakatake2000@yahoo.co.jp

会　費　正会員　：　年間 1口　１０万円

賛助会員　：　年間 1口　　３万円

購読会員　：　年間 1口　　１万円

振込先　口座名　：　資本論研究会

(郵便振替)　口座番号　：　01090-5-67283

第３回中日社会主義フォーラムに参加して

参加のきっかけ

数年前、関西共産主義者協議会（ＫＣＭ）の講演会で加々美さんの講演を聞く機会がありました。そのときふと、1988年に解明したソ連崩壊の原理的根拠について、これは現在の中国共産党にとって非常に適合した提起になることに気付き、中国に行ってみたいと思いました。その後、社会主義理論学会の2011年秋のソ連崩壊20年シンポジウムがたまたま生協の企画と合致していて参加し、そこで旧知の方々と再会し、中国に行きませんかというお誘いを受け、なおかつ、2012年2月の社会主義理論学会の研究会で、ソ連崩壊の原理的根拠について報告することができました。このときの懇親会で中国にフォーラムを企画してもらえるよう要請するという話になりました。

私は全然知らなかったのですが、社会主義理論学会では、2008年に日本に中国の研究者を招いてフォーラムを実施しており、そして2010年には中国でフォーラムがもたれていました。それで今回は3回目ということで、話が進み、9月3日～5日に実施されることになったのです。

気の重かった天安門事件研究

5月頃、第3回中日社会主義フォーラム開催が決定したので、以降中国の研究書の収集をはじめ、基礎知識の習得を開始しました。正直に言って、私は89年の天安門事件以降、中国についてはウオッチする気になれませんでした。というのも、69年の軍事組織建設に当たって参照したのはもっぱら毛沢東の著作であり、中国共産党の解放戦争の経験でした。この体験から言って、中国共産党の民衆弾圧にはまともに向き合う自信がなかったのです。私の当時の関心はソ連・東欧社会の変遷にあり、共産党が解党して以降の社会の状態の観察でした。

今回以前収集していた天安門事件のドキュメント（矢吹晋編『チャイナクライシス』全3巻、蒼蒼社）や新しく入手した『天安門事件の真相』上・下（蒼蒼社）を読んでみると、事件当時マスコミが報道した天安門広場での軍による学生の虐殺は事実無根であることが分かりました。戦闘は戒厳令の下、天安門広場に向けて進軍していった軍に対して北京市民が市内の大通りの数箇所で阻止線をはり、バスなどを倒してバリケードを築いて軍を阻止したところで発生したのです。この戦闘で1000人規模の市民が殺されましたが、天安門広場に最後まで残った学生1000名は、軍と交渉して平和裏に撤退していたのです。

うかつにもこんなことも知らなかったのですが、あと天安門事件は深刻な党内闘争がバックにあったということで、改革派の党組織がデモに参加し、89年6月6日の事件の前には100万規模のデモも行われていて、6日に阻止線を張られたところでは軍が溶解する可能性もあったのです。かろうじて踏みとどまった鄧小平でしたが、市民を虐殺したことで中国共産党の権威を低下させたのでした。しかしこの後、ソ連・東欧の共産党政権の崩壊が始まります。同じ年の11月にはベルリンの壁の破壊が始まり、12月にはルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊します。そして1991年12月にはソ連邦が崩壊するのです。この状況を見た鄧小平は、92年に社会主義市場経済プランを提起し、開放政策に梶を切ります。

ソ連崩壊による冷戦体制の崩壊は当時の資本主義世界を支配していた新自由主義に

とって、市場拡大のまたとはないチャンスでした。新自由主義のコンサルは国家的所有の民営化を盗賊同様の過激な方法で行うことを提案し、急激な市場経済化を推し進めました。当のコンサルの一人、サックスが後に自己批判したように、この改革はうまくは行きませんでした。翻って鄧小平の改革は、経済特区に外資の導入をはかり、それを起爆剤として中国経済全体の離陸をはかることに成功したのでした。そして20年後の今日、中国はGDPで日本を抜き去り、2020年代にはアメリカをも抜き去ると予想されています。世界の枢軸国の交替で、共産党が制御する資本主義が世界を制覇するのです。このような現実がある中で運良く中国に行ってこられたことは自分にとっても非常に意義がありました。タイミングが少しずれていたら、中止されるかもしれませんでした。

フォーラムのスケジュール

フォーラムは報告者に日本から8名、それに対して中国側から2人ずつ報告者が出て、2日間で23名の報告というハードスケジュールでした。

第1日目　9月3日
第一部　瀬戸広：21世紀社会における労働者政党の必要性
　　兪良早：中国革命と欧州革命に関するマルクスの「両極相連」思想
　　周建超：人類社会発展の多様性と中国の特色ある社会主義について
第二部　鎌倉孝夫：『資本論』に基づく社会主義
　　王永貴：マルクス・エンゲルスのイデオロギーの本質的特徴への深い究明
第三部　境　毅：ソ連崩壊の原理的根拠と『資本論』初版本文価値形態論の意義
　　劉　誠：レーニンの新経済政策と中国社会主義市場経済論
　　鄭吉偉：レーニンの新経済政策に対する再検討
第四部　田上孝一：生産力の質と疎外
　　秦　宣：中国の特色ある社会主義が科学的社会主義に対する理論的貢献
　　宋　倹：中国の特色ある社会主義の本質的特長について
第2日目　9月4日
第五部　岩田昌征：マルクス主義的社会主義の歴史的役割
　　李　輝：核心的価値を構築している社会主義の本質について
　　葉啓積：マルクス主義的社会発展観に対する科学発展観の「三次元的革新」
第六部　大西広：株式会社による「社会化された企業による社会」としての「社会主義」
　　鐘明華：持続的な発展　サライ・サルカーのエコ社会主義の価値要望
　　曹亜雄：当代における新しい社会運動の特徴と動向
第七部　石居孝夫：広松渉の「東北アジアが歴史の主役に」という最後の提言について
　　余双好：中国の特色ある社会主義理論体系の普及計画を実施する実践ルートの問題
　　王慶五：中国理論、中国問題と中国道筋
第八部　松井暁：現代規範理論とマルクス
　　許宝友：レーニン、スターリンと資本主義発展の不均等法則
　　王進芬：党内民主主義機能に関するレーニンの重要認識及び現実的啓示

中日社会主義フォーラム当日報告

解題　私の報告テーマは実は1988年暮れに解明していた事柄で、最近になって大阪自由大学で『資本論』に即した解説を始めていた内容と重複しているのですが、一応中国側に提出した文書としての歴史的意味を考慮して、一部を除いて収録しておきます。提出した文書は3通あり、報告を要約して翻訳してもらったものについては掲載していません。当日用に新たに作成したレジュメと報告正本を公開します。いずれも中国のフォーラムでは報告しなかったものです。

当日のレジュメ

はじめに

本日の報告について、既に翻訳していただいた文書があります。そしてそれの元になっている文書も日本語ですが持参しています。今日は、時間も限られていますので、ソ連崩壊の原理的根拠の解明に至る経過と、いくつかの要点についてお話します。

1.『資本論』第1篇　商品と貨幣　の通説

『資本論』商品と貨幣論の通説は、価値形態の発展として貨幣の生成を説く場合に、歴史的な発展に照応しているという理解でした。そしてブルジョア国家権力を打倒してプロレタリアートの独裁を樹立すれば社会改革は可能になるという革命論に立つ限り、この理解で問題はなかったのです。ところがロシア革命に成功したソ連では革命後も商品を廃絶できませんでした。これはなぜか、ということを考えていくうちに、『資本論』初版本文価値形態論との出会いがありました。

周知のように、マルクスは初版本文価値形態論では端的に、「観念的に表現すれば価値形態が価値概念から発生していることを論証する」（『資本論』初版、34頁）と述べているように、ヘーゲルに媚を呈して、論理的展開を心がけています。

ところが付録と、それをもとにした現行版価値形態論では、歴史的展開を重視しました。その方が初学者に分かりやすいことがあります。それとともに、マルクスが改定に当たって、なぜ、論理的展開よりも歴史的展開を重視したかというと、それは当面する革命において、政治権力の奪取による社会革命の実現という路線に疑問をもってはいなかったからでした。

マルクスの価値形態論改定のスタンスから、『資本論』を論理と歴史の照応として解釈する説が主流となりました。これによれば、価値形態の発展は、歴史的発展過程の叙述を含むことになり、歴史的にも商品交換から貨幣（商品貨幣）が生まれてきたという理解になります。しかし、1972年のニクソンによる金・ドル交換停止と、外国為替市場の変動相場制への移行は、はたして商品金が貨幣であるのかどうかという論争問題を起こしました。さらに、歴史照応説への批判には古代の信用・債権債務関係における計算貨幣の成立を、商品貨幣に先行するものとするケインズの見解があり、最近、楊枝嗣朗が『歴史の中の貨幣』（文眞堂、2012年）によって計算貨幣先行説を論じています。このようなマルクス主義の通説の行き詰まりを打破することが問われていたのです。

そこで初版本文価値形態論の論理的展開に注目しました。今なぜ論理的展開が求められるか、といえば、マルクスの共産主義革命への期待が裏切られ、政治権力を取ることによっては、商品・貨幣の廃絶は無理であることが歴史的に証明されたことがあります。そしてこのような現状を踏まえた上で、あくまでも共産主義革命を追及しようとすれば、商品・貨幣廃絶の実践的展望を明らかにすることが問われてきます。そしてこの実践的展望は、価値形態の論理的展開から導くことができるのでした。マルクス自身について言えば、初版本文で展開した価値形態の論理的展開を資本主義に対する批判的根拠としなければ、共産主義革命の展望が導けなくなるといったことは、予想もしていなかったことでしょう。

2．商品からの貨幣生成の無意識のうちでの本能的共同行為

それでは、ソ連崩壊の原理的根拠として、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為にある、という説について要点を述べます。初版本文価値形態論と現行版価値形態論との間には大きな違いがあります。下図にありますように、価値形態の発展を論じた部分で、形態Ⅳが全然違うのです。初版本文は、第Ⅳ形態は、第Ⅱ形態にある商品の系列が横並びにされたもので、商品世界は統一的な秩序にはありません。ところが現行版では第Ⅳ形態は第Ⅲ形態の特殊例としての貨幣形態で、ここには既に商品世界は統一的秩序を形成しています。

現行版では価値形態論で既に貨幣形態を登場させていますが、初版本文では貨幣形態には言及していなくて、第Ⅳ形態はカオス状の世界が描かれているのです。つまり論理的展開からすれば、価値形態の発展の段階では貨幣形態は展開しえず、それは交換過程を待って始めて現実化するというようにマルクスは考えていたのです。そして交換過程で商品に意志を宿した商品所有者たちが考える前に行動することで貨幣を生成させるのでした。つまり論理的には、商品からの貨幣の生成は、人の意志を支配し、人を道連れにすることを不可避としているのでした。さらに、この無意識のうちでの本能的共同行為は、商品取引の都度行われているものです。ですから貨幣は商品取引の都度生成されるものであり、人の意志を支配し、人を道連れにすることで発生する動的で社会的な存在であり、商品取引がなされなければ生成されることはないのです。

貨幣についてこのように動的・社会的に把握すると、この考え方を拡張して『資本論』の貨幣の資本の転化や、剰余価値の生産等の多くの論理的展開が資本を社会的で動的なものとして規定したものであることが判明してきます。資本とはまさに『資本論』で描き出された論理をその運動形態でもって実証することで維持され、増殖されているのです。その際、資本は人の意志を支配し、人を道連れにしていますが、それが人には自らの自発的意志にもとづく行動であるかのように考えられているのです。ここに資本の支配の独自性があり、資本の廃絶における困難があるのです。

Ⅳ　初版本文第Ⅳ形態

20エルレの亜麻布	＝1枚の上着
	＝10ポンドの茶
	＝・・・・・
1枚の上着	＝20エルレの亜麻布
	＝10ポンドの茶
	＝・・・・・
・・・・・	＝・・・・・

Ⅳ　現行版第Ⅳ形態　貨幣形態

20エルレの亜麻布	＝	2オンスの金
1枚の上着	＝	同上
10ポンドの茶	＝	同上
・・・・・・	＝	同上

３．商品・貨幣廃絶の実践的展望

貨幣や資本を社会的で動的なものとして捉えることで、その廃絶の実践的展望を議論することが可能となります。ただしこの問題はそれぞれ異なる国では異なる展望となるでしょう。私は日本における展望しか語ることはできません。本能的共同行為を無用とするような経済的関係を迂回してつくりだすという理論的展望は万国共通でしょうが、実践的には異ならざるをえないのです。

中国が世界の工場となっているのと対照的に日本は脱工業化社会となってきています。しかし日本の国家と支配階級はこの現実に対して適切な対応をなすことができず、あいかわらず従来型の経済成長に期待しています。脱工業化社会ということは営利事業と公的部門の衰退であり、非営利サードセクターの成長を含んでいます。つまり社会を公的セクター（国家、地方自治体）、私的セクター（営利事業）、サードセクター（非営利協同セクター）、というように分けたときに、サードセクターの育成が問われているのです。

日本にはサードセクターに属する事業体は沢山ありますが、それらは公的部門に補助金等で省庁縦割りにぶら下がっていて、それぞれがサードセクターに属しているというアイデンティティをもってはいません。サードセクターの統計すらないのが現状です。サードセクターに属する団体が、自らの役割を自覚できるようにしていくことが問われています。これらの団体はおおむね協同組合として組織され、農業、漁業、山村・森林、消費、介護、信用、共済などの分野を担っていますが、これらの団体が社会的経済の担い手として非営利協同の事業を拡大していくために相互に連携していくことが課題です。

他方、雇われて働いている人々は、この間の労働市場の不安定化と個人化により、分断され、貧困化が進んでいます。労働組合や既成政党もあるのですが、非正規労働者の闘いを支えるようにはなっていません。そうしたなかで、特に若者たちの間で雇われて働くことへの違和感を持つ人々が増えていっています。雇われて働かなくとも生活していけるための様々な取組みが始まろうとしています。資本主義社会の中で脱資本主義的な領域を増やしていくこと、このことが実践的な課題となってきています。雇われないもう一つの働き方をめざす働く人の協同組合は、日本ではまだ法制化されていませんが、ＮＰＯ、企業組合などの様々な法人の形で作られています。

そして世界では昨年からアラブの春からウォール街オキュパイといった、新しい社会運動が取り組まれてきましたが、日本でもやっと今年になって、大飯原発再稼動反対運動が契機となって、東京で５万人や10万人のデモが繰り広げられるようになりました。福島原発事故による世界への放射能拡散の責任は取りようもありませんが、せめて脱原発の社会運動による原発ゼロの日本をめざすことが責務です。反・脱原発運動は電力の自治の要求を含んでいて、雇われないもう一つの働き方と結びつけば、地域自治を実現するモデル地域の形成が可能です。というのも新しい社会運動は社会生成力をもっており、コミュニティやアソシエーションの形成を課題とすることができるからです。

商品・貨幣の廃絶の理論的展望が、本能的共同行為を無用とするような経済的関係を迂回してつくりだすことであれば、実践的には様々な取組みがこの迂回路の構想に組み込まれることで一つの力を発揮できることを期待できます。

なお、本日の質疑については、翻訳された報告からもお受けいたします。

2012年中日社会主義フォーラム報告正本
ソ連崩壊の原理的根拠の解明と『資本論』初版本文価値形態論の意義

目次

要約
第１章　商品からの貨幣生成の原理
１．『資本論』の価値形態論、三つの異文
２．初版本文による貨幣生成の原理
１）初版本文には貨幣形態は登場しない
２）初版本文物神性論による商品所有者の意識の解明
３）交換過程論における意志支配
３．ソ連崩壊の原理的根拠

第２章　人格を物象化させるシステムとしての商品
１．物象化（Versachlichung）と物化（Verdinglichung）
２．初版本文価値形態論の解読
１）価値形態は単なる等式ではなく、社会的象形文字
２）思考における抽象と、価値関係における抽象との違い
３）価値形態の秘密と謎
４）物象の人格化のメカニズム
５）物象化（秘密）と物化（謎・神秘性）

第３章　投機・信用資本主義の段階と99%が掲げる反資本主義の思想的課題
１）資本蓄積の変化、もう一つの資本蓄積（投機・信用資本主義）の台頭
２）投機・信用資本主義の歴史
３）投機・信用資本主義の思想
４）投機・信用資本主義の本質
５）投機・信用資本主義の歴史的地位
６）反資本主義の思想的課題

要約

現代社会の発展を考察しようとする時に、ソ連社会主義がなぜ崩壊したのかという問題の解明は避けて通れない。周知のようにソ連社会主義の初期の革命理念は、階級の廃絶であり、この大目的のために、プロレタリアートの独裁によって、商品・貨幣関係を廃絶しようというところにあった。この革命理念を実現しようとしたプロレタリアートの独裁という戦術の再検討が今問われている。

マルクス主義の古典中の古典である『資本論』、とりわけ初版本文価値形態論および交換過程論を読み解けば、商品からの貨幣の生成は、商品所有者たちの、無意識のうちでの本能的共同行為にもとづくものであることが知られる。この原理的認識にもとづけば、意志の力の限界を知ることが可能となる。

プロレタリアートの独裁は、国家権力の法的、行政的な行使のみならず、権力の超法規的行使による社会革命をめざす戦術であり、資本家階級や地主階級からの生産手段の収奪については実現可能であり、また実現された。しかし、商品・貨幣関係は容易に廃絶できず、ソ連でも1930年代になって、「社会主義的商品生産」という範疇によって、この残存を承認せざるを得なかった。

もし、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるということが革命党にとって周知のことであったならば、「社会主義的商品生産」といった範疇でその残存を事後承認的に認めるのではなく、商品・貨幣廃絶の実践的展望を明らかにすることが求められたはずである。

無意識のうちでの本能的共同行為を意志の力で廃絶することは不可能である。しかし、このような行為を必然的にとらせるような生産関係を、迂回して変革していくような作戦により、このような共同行為を未発のものとする生産関係を構築していくことはできる。現代の資本主義は高度に発展をとげ、その中枢諸国では爛熟、腐蝕が見られ、中枢諸国の交代が予想される時代に入っている。このような時期に、商品・貨幣廃絶の実践的展望を明らかにすることによってマルクス主義の再生を図ることは、国際的な共産主義運動にとって死活の課題である。以上のような認識に従い、次の諸点について問題提起をしたい。

1．商品からの貨幣の生成が商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によること、したがってその廃絶はプロレタリアートの独裁によっては成し遂げられないこと。

2．商品自体が人格の物象化・物象の人格化をなしとげるシステムであること、したがって現代社会では人々は商品や貨幣や資本に意志を支配された存在であり、この意志支配から逃れる脱物象化の運動が実践されねばならない。

3．信用制度の異常な発展は、社会と国家の破壊にまで進み、人々を反資本主義の運動に駆り立てていること、したがって、脱物象化の運動は現実的な基盤を拡大している。人々は国家の破産後の社会設計を余儀なくされていること。この意味で、今日の反資本主義を求める運動は、商品・貨幣の廃絶をめざした脱物象化の運動の発展であり、共産主義運動の現実的展開としての意義をもっていること。

第1章　商品からの貨幣生成の原理

1．『資本論』の価値形態論、三つの異文

周知のように『資本論』の価値形態論には三つの異文がある。初版の第1章商品のところに書かれているもの、これを初版本文と名づけておく。あと初版には付録がついていて、これは付録。そして最後に現行版の第1章商品のところの価値形態論で、これを現行版と呼ぶ。三つの異文の来歴は、マルクスが『資本論』初版の原稿をクーゲルマンに見せたところ、価値形態のところが難しすぎると言われて、これを学校教師風に解説した付録を書いた。そして第2版（現行版）では、マルクスは初版本文の価値形態論を全面的に書き換えたが、それは付録を土台にしている。だから現行版では付録はつけられていない。

三つの異文の間の相違は色々あるが、その最大のものは価値形態論における貨幣形態の扱いにある。現行版では価値形態発展の4つの段階の最終段階は貨幣形態であり、

付録もそうなのだが、初版本文では貨幣形態には一切言及されてはいない。この貨幣形態の扱いの相違が、初版で展開されているマルクスの貨幣生成論を見失わせてしまう結果になっている。

2．初版本文による貨幣生成の原理

1）　初版本文には貨幣形態は登場しない

まず、初版本文価値形態論においては価値形態の発展は次の段階として記述されている。

Ⅰ　相対的価値の第一形態あるいは単純な形態　（15頁）

Ⅱ　相対的価値の、第二形態・あるいは発展した形態　（24頁）

Ⅲ　相対的価値の、第三形態・あるいは第二形態を転倒しあるいは逆の関係においた形態（25頁）

Ⅳ　形態Ⅳ　（34頁）

Ⅰ～Ⅲについては付録や現行版との相違はない。しかし、Ⅳについては付録や現行版が貨幣形態を取り上げているのに対して、初版本文は、全ての商品が形態Ⅱをとり、「単純な相対的価値表現の決して終結することのない系列」（34頁）が無限に続く形となっている。つまり、初版本文価値形態論では、商品の社会的形態（端的には貨幣形態）が、商品の価値形態の発展だけからは望み得ないこと、第2章の交換過程論をまって始めて貨幣形態の生成が起きることを想定していたのである。つまり、初版本文の形態Ⅳは、どの商品もが貨幣形態になりうること、しかし商品Aがそうなれば、商品B、C、等々はそうはなれないこと、ということの確認だったのである。

2）　初版本文物神性論による商品所有者の意識の解明

商品章の最後は物神性論で締めくくられているが、この部分も現行版と初版では相当の相違があり、現行版では商品の神秘性（物神性）の暴露に焦点が当てられているが、初版の場合は人格が物象化する仕組みの暴露に焦点が当てられている。これは初版本文価値形態論が、もっぱら商品がいかにして社会的形態を獲得するかという観点から、商品を人格を物象化するメカニズムとして解き明かしていること、つまり商品の秘密の解明が企てられていることと関連している。先走って言っておけば現行版では商品の秘密の暴露は後景に退き、その謎の暴露（等価形態の謎性の解明）に焦点が移っているのである。

さて、初版の物神性論の中心的テーマは、商品という、人格を物象化するメカニズムに人が取り込まれたときに、人がどのような意識状態にあるかということの解明である。

「それでは、労働生産物が商品の形態をとるとき、その謎のような性格は一体どこからくるのであろうか？

もし人間たちが彼らの諸生産物を、これらの諸物象（Sache）が同質の人間労働のたんに物象（Sache）的な外皮として認められるかぎりにおいて、諸価値として相互に関係させるのだとすれば、このことのうちには同時にそれとは逆に、彼らのいろいろに違った労働は、ただ物象（Sache）的な外皮のなかの同質な人間的労働としてのみ認められているのだ、ということが含まれている。彼らが彼らのいろいろな労働を相互に人間労働として関係させるのは、彼らが彼らの諸生産物を相互に諸価値として関係さ

せるからである。人格的な関係が物象（Sache）的な形態によって隠されているのである。したがって、この価値の額には、それがなんであるか、は書かれていないのである。人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間労働に等値することを強制されているのである。彼らはそれを知ってはいない。しかし、彼らは、物質的な物を抽象物たる価値に還元することによって、それを行うのである。これこそは彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた無意識的、本能的な作用なのであって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産が彼らをそのなかに置くところの諸関係とから、必然的に生え出てくるのである。」（38 頁）

初版本文価値形態論では、商品が主役で、商品所有者は役割を果たしてはいない。そして交換過程論では商品所有者の行為が考察されるのだが、その中間に位置する物神性論では、このように商品所有者の意識が考察されている。商品は確かに人格を物象化するメカニズムではあるが、しかし商品それ自体は単なる物であり、それは所有者たる人格の意思行為によって商品として実存しうるのだ。では人格が、商品という人格を物象化するメカニズムに身を任せたときの意識はどのようなものか。

商品所有者たちが、自らの労働生産物を商品として扱うということは、私的所有物にその性格を変えないまま社会的な形態を与えるということであり、このメカニズムは価値形態論で解明されたように、物質的なものを抽象物たる価値に還元することなのだが、彼らはこのことを意識はせず、あたかももって生まれた本能に従っているかのように、この行為を行うのである。

3） 交換過程論における意志支配

初版本文価値形態論の第Ⅳ形態は、どの商品もが一般的等価物となりうることの確認であり、この確認で価値形態論は締めくくられていた。そして初版物神性論では、人格を物象化するシステムである商品とは、所有者たちの私的労働の産物を社会的な物にするという人々の社会的関係に他ならないのだが、所有者たちは、その内容を何も知らないまま、もって生まれた本能に従っているかのように、無意識的に生産物を商品にしていることが解明された。そしてこのような手順を踏んで交換過程における商品所有者たちの行為が分析されるに至るのである。

「諸商品は、自分たち自身で市場に行くことができないし、自分たち自身を交換しあうこともできない。だから、われわれは、それらの番人である商品所有者たちを探し出さねばならない。諸商品は、物であり、したがって人間に対しては無抵抗である。それらが従順でなければ、人間は暴力を用いることができる、言い換えれば、それらをつかまえることができる。これらの物を商品として互いに関係させるためには、商品の番人たちは、自分たちの意志がこれらの物においてある定在をもつところの諸個人として互いに関係しあわねばならない。・・・・諸個人はここでは、自分たちがなんらかの諸物象（Sache）を商品として互いに関係させることによって、互いに関係しあっているにすぎない。だから、この関係のあらゆる規定は、商品としての物象（Sache）の規定のなかに含まれている。」（45 頁）

物神性論で明らかにされたことは、商品所有者たちの行為は無意識的に商品の関係に組み込まれていくのだが、それはその内容については理解しないままであった。交換過程論では商品所有者たちの意識ではなくて意志が問題にされ、「自分たちの意志がこれらの物においてある定在をもつところの諸個人」というように述べられている。

つまり、商品所有者たちの意志は、商品という物象に支配されているのである。現行版では、この叙述は「自分の意志をこれらの物に宿す人格」（現行版、90 頁）というように変更されて分かりやすくなっている。

この現行版に即して考えると、商品とは人が意志を宿せるような存在だということになる。単なる物には意志を宿せないが、商品は物象だから意志を宿せるのであり、私はこれを商品が概念的存在であるとマルクスが見ていたと思っている。概念的存在という意味は、結局人間の思考様式に似た、抽象力と判断力とをもった存在という意味である。人間の思考というのは、デカルトが思考法則としてこれを定式化しているように、物事を分析して抽象して、とことん簡単なところまでいって、それを思考のなかで再度組み立てて総合して、それで概念的に把握して判断をするという、対象の理解の仕方である。実は、商品という物象もそういう思考に似たことを行っている。商品自身が他の商品との価値関係のなかで、思考に似たことを行っているのだ。彼らが行っているのはどういうことかと言ったら、商品が「考える」と言っても、人間のように余計なことではなくて、自分の価値がいくらかということを「考えて」いる。自分の価値がいくらかということは商品相互の関係のなかで、彼らが決めているわけだ。だから、人間はその物象に意志を宿すことができる。

「もっと詳しく見ると、どの商品所有者にとっても、他人の商品はどれも自分の商品の特殊的な等価物とみなされ、したがって、自分の商品はすべての他の商品の一般的な等価物と見なされる。ところが、すべての商品所有者が同じことを行うから、どの商品も一般的な等価物ではなく、したがってまた諸商品は、それらが価値として等置され価値量として比較されあうところの、一般的な相対的価値形態を、もっていない。だから、諸商品は、一般的には、商品として相対するのではなく、生産物または使用価値としてのみ相対することになる。

わが商品所有者たちは当惑のあまりファウストのように考え込む。初めに行為ありき、と。だから、彼らは考えるよりも以前にすでに行為していたのだ。商品の諸法則は、商品所有者たちの自然本能において実証されている。」（47 頁）

ここで、ゲーテを引きながら述べられている事柄に注目してみよう。商品に意志を宿した商品所有者たちが、当惑したのは、彼らには初版本文第Ⅳ形態が望ましいものに見えるからだった。商品が概念的存在であり、人がそれに意志を宿せるとしても、初版本文の第Ⅳ形態を作ってしまっては一般的、統一的な商品交換は成立しない。普通に考えれば、商品所有者たちは自分が所有している商品で他の商品が買えればそれにこしたことはないから、商品所有者たちが自分の頭で考えれば第Ⅳ形態に落ち着いてしまう。自分の商品を一般的等価物にしたいという意識は、しかし、そのことによってどの商品も一般的等価物にはなれず、一般的な商品交換が不能となるという現実に直面する。しかしマルクスは考える前にすでに行為していた、と言っている。ここで初版本文価値形態論の第Ⅳ形態が想起されるべきである。その第Ⅳ形態が貨幣形態ではなく、商品所有者たちが自分の頭で考えて、自分の商品を一般的等価物にしようとする結果でき上がる形態であったことは、貨幣生成が、価値形態論の枠組みの外でなされるものであり、それが商品所有者たちのどのような行為であるかを交換過程論で解明していくための手立てだったのだ。では「商品の諸法則は、商品所有者たちの自然本能において実証されている。」とはどのようなことか。

「彼らが、自分たちの商品を、価値として、それゆえに商品として、互いに関係させることができるためには、彼らが、自分たちの商品を、一般的な等価物としてのな

んらかの別の一商品に対立的に関係させる、という手段にたよるほかはない。このことは、商品の分析が明らかにしたところである。ところが、社会的な行為だけが、ある特定の商品を一般的な等価物にすることができる。だから、すべての他の商品の社会的行為が特定の一商品を排除し、この商品のうちに、すべての他の商品が自分たちの価値を全面的に表わすことになる。このことによって、この商品の現物形態が、社会的に認められる等価形態になる。一般的な等価物であるということが、社会的過程によって、この排除された商品の独自的な社会的機能となる。こうして、この商品は——貨幣になるのである。」(47～8頁)

ではなぜ考える前に行動できたのか。商品所有者たちが自分の頭で考える前に行動できたのは、商品に意志を宿しているからだった。自分の考えでは自分の商品を一般的等価物にしたいのだが、それでは商品交換は成立しない。ところが諸商品は自分以外の特定の商品を一般的等価物とすれば、一般的な商品交換が可能となるというサインを商品所有者たちに送っている。このサインに従って行為することが行われているのだ。この行為の結果、商品所有者たちは自分の商品ではなく、他の一定の商品で自分の商品の価値を表現することで一般的等価物を作り出すことができる。これは商品所有者たちの共同行為であるが、商品に意志を宿したことの帰結として作り出された行為であり、人々はこの行為については自らの頭で考える必要はなかった。それゆえ、貨幣生成の共同行為は、無意識のうちでの本能的共同行為なのである。

つまり、貨幣生成の無意識のうちでの本能的共同行為というのは、一般的等価形態(貨幣形態)にある一定の排除された商品で自分の商品の価値を表現するという、単にそれだけのことだ。その共同行為は、商品所有者にとっては自分の商品の市場価格はいくらと知って、それで値付けをしているという行為の裏面にある。個々の商品所有者にとっては値付けをしているという行為が、実は貨幣を生成する共同行為に各々が参加するという意義をもっているのだが、それは無意識の行為だから意識されない、そういう変な行為の構造があるという点が貨幣生成論の本質的なところである。

3．ソ連崩壊の原理的根拠

以上で述べたように、初版本文価値形態論と物神性論、そして交換過程論を解読して、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって商品から貨幣が生成されているということが判明すれば、貨幣は歴史的一時点で形成され、それがずっと継続されているものとしてではなく、現在の毎日の無数の商品交換の過程で都度生成され続けていることが判明する。そしてこのように絶えず再生産され続けているものであるがゆえに、それの廃絶も可能であるが、しかし、それは法律や行政といった、意志行為の枠外にあるのだ。商品・貨幣の廃絶という問題については、無意識のうちでの本能的共同行為を必要とはしない経済的関係を迂回して形成していくという課題が見えてくる。そしてソ連の経験は、この無意識のうちでの本能的共同行為を、政治権力や法律的規制や行政的方法で廃絶しようと試みたがそれを実現することができなかったということとして、総括できる。

第2章　人格を物象化させるシステムとしての商品

1．物象化(Versachlichung)と物化(Verdinglichung)

まず冒頭で、周知のことだと思われるが、レーニンの言葉の引用から始めたい。レーニンは『哲学ノート』で「ヘーゲルの論理学全体をよく研究せず理解しないではマルクスの資本論、とくにその第1章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった。」(『レーニン全集』日本語版38巻、150～1頁)と述べている。レーニン以降も『資本論』第1章についての理解が進んでいるとは思われない。そして現在のような資本主義の爛熟的発展期において、資本主義への批判を、商品・貨幣への批判から始めることが問われているが、そのためにもレーニンの言葉をかみ締める必要がある。

マルクスの商品・貨幣論の理解にとって避けて通れないのが、物象化(Versachlichung)と物化(Verdinglichung)の区別である。マルクス自身が用語を区別して使っているにも拘らず、長谷部訳を除く日本語版、ロシア語版、中国語版では区別されていない。

マルクスがわざわざ別の用語を使って区別した理由を知ることが大事である。物象化については、人格の物象化と物象の人格化というような表現がある。このようなことが起きる仕組みは物神性論で解明されているが、マルクスは他方そこでの課題を商品の神秘性や物神性の解明にも置いている。それで、物象化を物化と同じものと見なす考え方も生み出されている。しかしマルクスの構えは、物象化という事態があり、これが人間の意識に幻影的形態を反映させるという二重の考察にもとづいて、商品の物神性を解き明かしている。だから物化とは、この人格が商品に物象化されたときに人格の意識に昇る幻影的形態に関連し、商品の交換可能という社会的力が、そのものの自然的属性から生じているように見えることにもとづいて起きている事態のことだ。

他方で物象化とは、価値形態論で解明されているが、まずは人々が自らの生産物を商品として扱う時に起きる人々と商品との関係の転倒であり、人々の社会的力が商品という物象の社会的力に頼る形でしか発揮できないという事態のことなのだ。マルクスは価値形態の秘密と謎というように二つの事柄を説いているが、秘密は物象化に関連し、謎は物化に関連している。そしてまずは価値形態の秘密こそが理解されねばならない。以上を前置きとして、初版本文の価値形態論を読み解いていく。なお頁数の関係で以下は論文「大阪自由大学資本論講義記録(第2回)」(『ＡＳＳＢ』誌、第20巻第2号所収)の要約である。

2．初版本文価値形態論の解読

1)　価値形態は単なる等式ではなく、社会的象形文字

価値形態の秘密をリンネル＝上着という簡単な価値形態で解き明かしている初版本文価値形態論は、『資本論』の中でも一番難解な箇所である。それの解読がなされなければならない。まずマルクスは次のように述べている。

「リンネルは、一つの使用価値すなわち有用物の姿で、この世に登場する。それゆえ、その糊でごわごわした物体性すなわち自然形態は、その価値ではなくて、価値形態の正反対物なのである。それはそれ自身の価値存在を、さしあたりはまず、自分に等しいものとしての他の一つの商品、上着に連関することによって、示すのである。もしリンネルがそれ自身価値でないならば、リンネルは価値としての・自分に等しいものとしての・上着に連関することはできないであろう。質的にはリンネルは自分に

上着を等置するのであるが、そうするのは、リンネルが、同種の人間的労働の・すなわちそれ自身の価値実体の・対象化としての上着に関連することによってである。そしてリンネルが自分に、x着の上着ではなくて1着だけの上着を等置するのは、リンネルが単に価値一般であるだけではなくて一定の大きさの価値であり、しかも1着の上着が20エレのリンネルが含んでいるのとちょうど同じだけの労働を含んでいるからである。」(久留間鮫造『マルクス経済学レキシコン』第11巻、23〜5頁、原典、16頁)

まず価値形態とは超感性的なものであり、感性的につかみうるリンネルや上着といった個々の商品の等置の関係において、超感性的な現象形態がどのように現れているかということを読み解くことが問われている。超感性的な現象形態といったものが果たしてありうるのか、あるいはそのような現象形態は認識可能なのか、このような疑問が当然出てくるが、一旦脇において、マルクスの分析を追って行く。

リンネル=上着、という形態は数式の形をとっているが、今必要なことはこれを量的関係の表示としてではなくて、社会的象形文字として解読することである。だからそこに量的関係を見るのではなくて、意味を解読しなければならない。このことが分かれば、言語表現も、超感性的なものであることが判明する。音や文字は感性的に把握できる自然物であるが、意味は超感性的なものであり、かつ言語は人間が意味を理解し、表現し、それによって思考する意識形態そのものなのだ。

リンネル=上着、という社会的象形文字の意味は、まずはこの関係が「質的にはリンネルは自分に上着を等値する」という現象形態をとっていることとして解析することから解読が始まる。ここでリンネルは上着に関連しているのだが、この関連の中身を「質的にはリンネルは自分に上着を等置する」と視ることで、この場合の同等な質が、価値であり、労働であることを発見できるのである。

「リンネルは、上着にたいするこの連関によって、一石で何鳥をも仕留めるのである。リンネルは、他の商品を自分に価値として等置することによって、価値としての自分自身に連関する。リンネルは、価値としての自分自身に関連することによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から区別する。リンネルは自分の価値の大きさ—そして価値の大きさは価値一般と量的に計られた価値との両方である—を上着で表現することによって、自分の価値存在に自分の直接的な定在とは区別される価値形態を与える。リンネルは、こうして自分を、自分自身において分化したものとして示すことによって、自分をはじめて現実に商品として、すなわち同時に価値でもある有用物として示すのである。リンネルが使用価値であるかぎりでは、それは一つの自立した物である。これに反して、リンネルの価値は、ただ、他の商品・たとえば上着・にたいする関係のなかにおいてのみ現れるのであって、この関係のなかでは、上着という商品種類がリンネルに質的に等置され、したがってまた一定の量において同等とみなされ、リンネルの代わりとなり、リンネルと交換可能なのである。それゆえ、価値は、使用価値とは区別された固有の形態を、ただ交換価値としてのそれの表示によってのみ、受け取るのである。

リンネルの価値の上着での表現は、上着そのものに一つの新しい形態を刻印する。じっさい、リンネルの価値形態とは、何を意味するのであろうか？それは、上着がリンネルと交換可能である、ということである。上着はいまやまったくありのままの姿で、上着という自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、一つの交換可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態を持つ。等価物という規定は、商品

が価値一般であるということを含むばかりでなく、その商品がその物的な姿において、それの使用価値において、他の商品にたいして価値として意義をもち、したがってまた直接に交換価値として他の商品のために存在している、ということを含むのである。」(同書、25頁、原典、16〜7頁)

リンネル=上着、という社会的象形文字の解読が、ここでは社会関係における両極の役割と、両極の関係で成立している形態規定の内容の分析としてなされている。両極にあるものはリンネルと上着という使用価値であり、それ自体はありふれた物である。ところが両者が価値形態を取ると、「質的にはリンネルは自分に上着を等置する」という意味が発生する。そしてこのことは、この社会関係で形成されている事態が、リンネルにとっては価値としての自分自身と関係していることであり、そしてそのことは同時に、この関係を使用価値としての自分自身とは区別された存在として表示し、その上にさらにこの区別された存在を価値形態として現象させているというように解析できるのである。そしてこの現象してきた価値形態、その内容は決して感覚的に認識することはできないのであるが、この価値形態において、リンネルが上着に直接交換可能性という社会的力を与えるように形態規定しているのである。この関係のなかでは上着はその自然形態のままで、等価物という社会的力をもつのである。

一つの例えを考えてみよう。人と人との対面の関係を想定しよう。AさんとBさんとが対面関係にあるときに、AさんがCさんのポケットから財布を失敬したとしよう。するとそれを見たBさんはAさんをとがめる。このときにA＝Bという関係で、表示できる事柄がある。それは両者が法律的関係に入っているということだ。Aさんは犯罪的行為を犯すことでBさんに働きかけ、法律という社会的な共通性の関係を顕現させて自分にBさんを等置する。そうすることで、Aさんは自然人としての存在とは区別された法律的存在として自らを表示し、その上に、相手であるBさんの仕草で、自らの行為の犯罪性を現象させる。

例えはいつでも比喩的である。ここでも商品と意思をもつ人間との違いが当然にも現れているが、しかし共通な事柄は、社会関係が常に形態規定を伴うということだ。商品の価値形態にあっては、等価形態にある商品上着が、価値形態による形態規定によって、リンネルと交換可能だという社会的力を受け取るのであるが、法律的関係の場合はBさんが、自然人でありながらAさんとの法律的関係の中では、法律という社会的なものの化身とされているということであり、ここに形態規定の働きを読み取ることができる。社会的形態規定が社会的関係においては働いているという事態は共通であり、この意味でマルクスが商品の価値形態論で社会関係の意味を解読したことが、社会関係一般の解読に応用できるのだ。

2） 思考における抽象と、価値関係における抽象との違い

次は少し長いが、重要なところなので、厭わず引用しておく。

「価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明に結晶した労働の凝固体をなしている。ところが、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは—そして必ずしもどの商品体も労働の痕跡を示しているわけではない—、それは無区別な人間的労働ではなく、織布、紡績、等々であって、これらの労働もけっして商品体の唯一の実体をなしているのではなく、むしろもろもろの自然素材と混和されているのである。リンネルを人間労働の単に物的な表現として把握するためには、それを現実に物にしているところのすべてのものを

度外視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容ももたない人間的労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、一つの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。ところが、諸商品は諸物象である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的にそういうものでなければならない。言い換えれば、諸商品は、それらがなんであるかを、それら自身の物象的な諸関連のなかで示さなければならない。リンネルの生産においては一定量の人間的労働が支出されてしまった。リンネルの価値は、このように支出された労働の単に反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。その価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが価値としての上着を自分に等置しながら、他方同時に、自分を使用対象として上着から区別する、ということによって、上着は、リンネル - 物体に対立するリンネル - 価値の現象形態となり、リンネルの自然形態とは区別されるリンネルの価値形態となるのである。

20 エレのリンネル＝1 着の上着、または x 量のリンネルは y 量の上着に値する、という相対的価値表現のなかでは、上着はただ価値または労働凝固体としてのみ意義をもつのではあるが、しかしまさにこのことによって、労働凝固体は上着として意義をもち、上着は、人間的労働が凝固している形態として意義をもつのである。使用価値上着がリンネル - 価値の現象形態になるのは、ただ、リンネルが抽象的人間労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的物質化としての上着物質に連関しているからにすぎない。上着という対象性は、リンネルにとっては、同種の人間的労働の感覚的につかまえられる対象性として、したがって自然形態における価値として、意義をもつのである。リンネルは価値としては上着と同じ本質のものであるがゆえに、上着という自然形態がこのようにリンネル自身の価値の現象形態になるのである。しかし、使用価値上着に表わされている労働は、人間的労働そのものではないのであって、一定の、有用的な労働、裁縫労働である。人間的労働そのもの、人間的労働力の支出は、たしかにどのようにでも規定されることができるが、それ自体としては無規定である。それは、ただ、人間的労働力が特定の形態で支出されるときにだけ、特定の労働として実現され、対象化されることができるのである。というのは、ただ、特定の労働にたいしてのみ、自然素材は、すなわち労働がそのなかに対象化されていく外的な物質は、相対するのだからである。ただヘーゲル的な『概念』だけが、外的な素材なしに自己を客観化することをやってのけるのである。」（同書、27～29 頁、原典、19～9 頁）

ここでマルクスは思考による抽象化と、価値形態における抽象化との違いについて述べている。自身が『資本論』冒頭で諸商品を抽象的人間労働に還元したことを念頭において、まず思考による抽象がもたらした抽象的人間労働の対象化としてのリンネルが「一つの思考産物」であることを明らかにし、それが価値形態においてリンネルが抽象化されることとは別の事態であることを示している。思考による抽象は分析的抽象で、差異を捨てて共通な物を取り出すことであるが、しかしそこで得られた抽象的な対象性とは思考産物だった。では商品の価値形態ではリンネルはどのようにして抽象化されるのであろうか。

思考産物ではないリンネルの抽象性とはリンネルの上着との価値関係のなかに発見するしかない。この場合のカギも「質的にはリンネルは自分に上着を等置する」という理解が出発点である。この等置の関係において、リンネルを生産した労働がどのような役割を果たしているかというと、上着に自分に等しい物として関連するということであるから、この場合は双方に共通な物は労働であり、労働の等しい関係が成立しており、リンネルを生産した労働が上着に反射しているという事態が解読できる。そこでリンネルを作る労働がリンネルに反射している場合、それがどのような労働かは想像できるし、この場合はリンネルを使用価値として分析しているわけである。ところが、リンネルを作る労働が上着に反射しているとすれば、上着を見てもリンネルを作る労働を想像することはできない。この意味で、リンネルを作る労働が抽象化されていることになる。

さて、次にこのリンネルによる上着での価値表現は上着に形態規定を与え、上着を労働凝固体としている。でもその場合、上着を作る労働が、抽象的人間労働の産物というわけではなくて、上着は裁縫労働という具体的有用労働の産物だ。具体的有用労働の産物であり、それ自身自然物である上着は、リンネルとの価値関係のなかでだけ、その自然形態のままで、単なる労働凝固体としての意義をもつものとなるのである。

順序は逆になるが、思考による抽象化の対象としての商品が、人間労働の単に「物」的な表現として、単なる「物」として規定されているのに対して、マルクスが「諸商品は諸物象である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的にそういうものでなければならない」と述べていることに注目しよう。ここからは商品が単なる物から物象へと転変していく仕組みが説かれているのである。

3） 価値形態の秘密と謎

商品が物象として存在する仕組みは、商品の価値形態そのものであるが、その価値形態においては人間労働の抽象化が、思考による抽象化とは異なる事態抽象としてなされるので、理解するのに非常な困難がともなう。

「われわれはここで、価値形態の理解を妨げるすべての困難のかなめに立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること、あるいは、使用価値を形成する労働を、単に人間的労働力の支出として商品価値から評価されるかぎりでの同じ労働から区別することは、比較的たやすい。商品または労働をまえの形態で考察するときには、あとの形態では考察しないし、あとの形態で考察するときにはまえの形態では考察しない。これらの抽象的な対立物はおのずからたがいに分かれあうのであり、したがってまたたやすく見分けられうるのである。商品の商品にたいする関係のなかにだけ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。これは一見するといかにも奇異に思われるが、立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は、もともと一つの二重物、すなわち使用価値および価値、有用的労働の生産物および抽象的な労働凝固体である。それゆえ商品は、自分が商品なのだということを表わすためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の諸商品との交わりにおいてはじめて獲得するものである。だが、商品の価値形態は、それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は、その使用姿態、その自然形態である。ところで、一商品、たとえばリンネ

ルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだから、それは何か他の自然形態を、他の一商品の自然形態を、自分の価値形態にしなければならない。それは、直接に自分自身にたいしてすることができないことを直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。それは自分の価値を、それ自身の身体で、言い換えればそれ自身の使用価値で表現することはできないが、しかしそれは、直接的な価値定在としての他のある使用価値あるいは商品体に関連することはできる。それは、それ自身のうちに含まれている具体的労働にたいしては、抽象的人間労働の単なる実現形態としての表現形態としてのこの労働に関係するということはできないが、しかし、他の商品に含まれている具体的労働にたいしてはそうすることができる。そうするためには、その商品はただ、他の商品を自分に対して等価物として等置しさえすればよい。一商品の使用価値が他のある商品のために存在するのは、まったくただ、それがこの他の商品の価値の現象形態として役立つかぎりにおいてのみである。もし、x 量の商品 A=y 量の商品 B、という簡単な相対的価値表現において、ただ量的な関係だけしか考察しないならば、そこに見いだされるものもまた、ただ、相対的価値の運動にかんするまえに展開した諸法則—それらはすべて、商品の価値の大きさはそれの生産のために必要な労働時間によって規定されている、ということにもとづいている—だけである。だがもし、両商品の価値関係をその質的な側面から考察するならば、われわれはこの簡単な価値表現のうちに、価値形態の秘密を、したがってまた、つづめて言えば貨幣の秘密を発見するのである。」（同書、31～3 頁、原典、19～21 頁）

マルクスが価値形態の理解を妨げる困難の要、と言っていることは価値形態の秘密に関連している。ここで価値形態の秘密と謎の区別について簡単にふれておく必要がある。価値形態の謎とは、上着が価値関係において形態規定されて、上着の自然形態そのものが価値の実現形態とされている、という事態が、人々には、上着が価値の実現形態であること、つまりはリンネルとの直接的交換可能性という力をもつことが、リンネルとの価値関係の外部にある上着という自然物そのものに備わっているように見える、という誤った認識を生み出さざるを得ない事を指している。これに対して秘密の方は、この謎が生み出される根拠のことだ。そして価値形態の秘密とは、通常使用価値が価値の現象形態となることというように理解されているのだが、このような理解ではこの秘密の上面を眺めたかぎりのものでしかない。

価値形態の秘密とは、煎じ詰めれば商品が物象として成立していることの解明だ。それは上着の使用価値が価値の現象形態となっていることに違いはないのだが、これがどのようなメカニズムでそうなるかということこそが問題なのだ。その際の要は、リンネルが上着を価値の現象形態とするためには、上着を作る具体的労働を抽象的人間労働の単なる実現形態にしなければならないということだ。リンネルも上着も共に労働生産物であり、したがって、生理学的意味での人間労働という共通性を持ち、この意味で双方とも抽象的人間労働である、という思考における抽象化とは違う形での抽象化が、リンネルと上着の価値関係では行われているのだが、この抽象化はリンネルが上着を等価物として自分に等置するだけでいいのである。

リンネル商品の所有者は、上着の使用価値を価値の実現形態にしようという意図をもって上着に関連するわけではない。しかしリンネル＝上着という価値形態にあっては、上着を作る具体的労働を抽象的人間労働の実現形態とするという抽象化がなされていて、そしてこの抽象化によって、商品が社会的形態を獲得するのである。私的所

有物であるリンネルは、同じく私的所有物である上着と交換可能である、というこの形態こそ、私的労働の産物を私的性格を変えないままで社会に通用させる社会的形態なのである。こうして商品は物象となる。人々は何も意識しないで商品の本性に従うことで、社会的交易を実現できるのである。

4） 物象の人格化のメカニズム

価値形態論の解明の視角が初版本文と現行版とでは相違があり、初版本文では商品の社会的形態がいかにして成立するかという視角であったが、現行版では労働の社会的形態という視角になっている。この視角の相違に加えて、初版本文の価値形態論では、貨幣形態は説かれてはいないのに、現行版では物神性論の前にすでに貨幣形態を説いてしまっていること、ここから物神性論においても初版本文と現行版との相違が出てくることは予想できる。しかし、この検討はあまりにも細かい論点になるので今回は取り上げない。とりあえずは初版の物神性論の解読から始めて行きこう。訳文は江夏訳を採用するが、物象と物の訳しわけをしてはいないので、原文に当たって修正してある。

「それでは、労働生産物が商品という形態をとるやいなや、労働生産物の謎めいた性格はどこから生ずるのか？

人々が彼らの諸生産物を、これらの諸物象が同種の人間労働の単なる物象的外皮として認められているかぎりにおいて、価値として互いに関係させるならば、このことのうちには、同時にこのこととは逆に、彼らのいろいろな労働が、物象的外皮のなかでは、同種の人間労働としてのみ認められる、ということが含まれている。彼らは、自分たちの諸生産物を価値として互いに関係させることによって、自分たちのいろいろな労働を人間労働として互いに関係させているのである。人的な関係が物象的な形態で覆い隠されている。したがって、価値の額には、価値が何であるかは書かれていない。人々は、自分たちの諸生産物を商品として互いに関係させるためには、自分たちのいろいろな労働を、抽象的な、人間的な、労働に、等置することを強制されている。彼らはこのことを知ってはいないが、彼らは、物質的なものを抽象物である価値に還元することによって、このことを行うのである。これこそが、彼らの頭脳の自然発生的な、したがって無意識的で本能的な作用であって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産によって彼らがおかれているところの諸関係とから、必然的にはえ出てくるものである。」（江夏美千穂訳『初版資本論』幻燈社、61～2 頁、原典、38 頁）

価値形態論では商品が主役で、商品が物象として存在している様式の解明がなされていた。価値形態論の一番難解な箇所を解読し終えたいま、この物神性論の叙述は、意外とすらすらと理解可能ではないだろうか。物神性論では、商品という物象と商品所有者という人格との関係をテーマとしていることが判明し、物象の人格化と人格の物象化の仕組みと、その仕組みが人格の意識に生みだす意識内容とが問題にされているのだ。

物象の人格化と人格の物象化は、二つの区別された過程ではなくて、人々が諸生産物を商品として扱うという、一つの行為から生まれる。生産物を商品とするということは一つの行為であり、人々の意識的活動に他ならないのであるが、しかしその意識は、自らの行為が物質的なものを抽象的なものである価値に還元しているというこの行為のもつ意味については理解がないのだ。つまり物質的なものを抽象的なものに還

元するという事態は、商品の価値形態で商品自体の社会的行為でなされていて、商品に物象化された所有者たちの意識の外にあり、所有者たちは商品という意識を持たない存在に物象化されているのである。だから、所有者たちにとっては、生産物を商品にするという行為は、無意識のうちでの本能的行為となる。

「生産者たち自身の社会的運動が、彼らにとっては、諸物象の運動という形態をとっているのであった、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御されているのである。ところで最後に価値形態について言えば、この形態こそはまさに、私的労働者たちの社会的な諸関係を、したがって私的諸労動が社会的に規定されていることを、あらわにするのではなくて、物象的に覆い隠している。私が、上着や長靴等々は、抽象的な、人間的な、労働の・一般的な具象物としてのリンネルに、関係していると言えば、この表現の奇異なことは明白である。ところが、上着や長靴等々の生産者たちが、これらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに関係させると、彼らにとっては、自分たちの私的諸労働の社会的な関係が、まさにこのような奇異な形態で現れるのである。」(同書、62～3 頁、原典、39 頁)

物象の人格化と人格の物象化という事態が生みだされる仕組みとは、私的労働生産物を社会的なものにしていくときに、生産物を商品とするという無意識のうちでの本能的行為によって、物象相互の社会的関係に人格の意思を委ねることで、私的労働を社会的なものへと転化する仕組みである。つまり、リンネルという具体的労働の産物を単なる抽象的労働の実現形態とすることで個々の具体的労働の産物を社会に通用できるものにする、という物象のメカニズムを作動させることなのだ。だからこの事態は生産者たち自身の社会的運動が、諸物象の運動という形態を取り、したがって彼らはこの運動を制御はできず、逆に物象の運動によって制御されることを意味するのだ。

「私的生産者たちは、自分たちの私的生産物である諸物象に媒介されて、初めて社会的な接触にはいる。だから、彼らの労働の社会的な諸関係は、彼らの労働における人々の直接的に社会的な諸関係として、存在し現れているのではなくて、人々の物象的な諸関係または諸物象の社会的な関係として、存在し現れている。ところで、物象を社会的な物として、最初にかつ最も一般的に表わすことは、労働生産物が商品に転化することなのである。

つまり、商品の神秘性は次のことから生じている。すなわち、私的生産者たちにとっては、自分たちの私的労働の社会的な諸規定が、労働生産物の社会的な自然規定性として現れているということ、人々の社会的な生産諸関係が、諸物象の対相互的および対人的な社会的諸関係として現れているということ。社会的総労働にたいする私的労働者たちの諸関係は、彼らに対立して対象化され、したがって、彼らにとっては諸対象という形態で存在している。商品生産者たちの一般的な社会的生産関係は、自分たちの生産物を商品として、したがって価値として取り扱い、この物象的な形態において、自分たちの私的所労働を同等な人間労働として互いに関係させる、という点にあるのであるが、このような商品生産者たちの社会にとっては、抽象的な人間にたいする礼拝を伴うキリスト教が、ことにそれのブルジョア的な発展であるプロテスタントや理神論等々におけるキリスト教が、もっともふさわしい宗教形態である。」(同書、63～4 頁、原典、39～40 頁)

マルクスはここで、物象を社会的なものとして、最初にかつ最も一般的に表わすことは、労働生産物が商品に転化することであると述べている。つまり私たちが、商品の価値形態を商品という物象の生成と捉え、物象の人格化の仕組みを物神性論に読み

取るという試みは正鵠を得ているのだ。そしてこれらの観点は現行版による限りは明らかになりにくいのであり、初版本文価値形態論にまでさかのぼる必要があったのだ。そして商品は物象でありながらもそれ自体は意思をもたないモノであるから、商品所有者の意識との関連で、物象の人格化のメカニズムを説く必要があり、商品所有者の無意識のうちでの本能的行為として生産物を商品とする行為がある、ということが解明されたのである。

初版本文では、価値形態論で貨幣は説いておらず、交換過程論のところで、商品の本性に意志を宿すことで実現する、無意識のうちでの本能的共同行為が貨幣生成のメカニズムであること、私たちはこの確認から今回の報告を説き起こした。そして、交換過程の前に、すでに生産物を商品にするという行為もまた無意識的な本能的行為であることを確認したのだ。このような理解のうえで、商品の神秘性、謎的性格、あるいは物神性、などといわれている問題、つまり物象の成立を解き明かす価値形態の秘密ではなくて、物化に関連する謎の方の解明に移ろう。

5） 物象化（秘密）と物化（謎・神秘性）

初版の物神性論では、商品の神秘性についてはそれがどこから生じるかについて述べられてはいるが、現行版のほうが分かりやすくまとめている。現行版によって商品の神秘性について見ておく。

「それでは、労働生産物が商品形態をとるや否や生ずる労働生産物の謎的性格は、どこから生ずるか？あきらかに、この形態そのものからである。人間の諸労働の同等性は、労働諸生産物の同等な価値対象性という物象的形態を受けとり、人間的労働力の支出の、その時間的継続による度量は、労働諸生産物の価値の大いさという形態を受けとり、最後に、生産者たちの諸労働のかの社会的諸規定がそこで実証される彼らの諸関係は、労働諸生産物の社会的関係という形態を受けとる。

だから、商品形態の神秘性なるものは、単につぎの点にある、――というのは、商品形態は、人間じしんの労働の社会的性格を、労働諸生産物そのものの対象的性格として・これらの物の社会的な自然属性として・人間の眼に反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係を、彼らの外部に実存する諸対象の社会的な一関係として人間の眼に反映させるということ、これである。この交替によって、労働諸生産物は商品――感性的で超感性的または社会的な物――となる。たとえば、物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的刺激としては現れないで、眼の外部にある物の対象的形態として現れる。だが、視覚のばあいには、外的対象たる一つの物から眼という他の物に、現実に光が投ぜられる。それは、物理的な物と物とのあいだの物理的な一関係である。これに反して商品形態は、また、それが自らをそこで表示する労働諸生産物の価値関係は、労働諸生産物の物理的本性、および、それから生ずる物的諸関係とは、絶対になんの係りもない。それは、人々そのものの一定の社会的関係に他ならぬのであって、この関係がここでは、人々の眼には物と物との関係という幻影的形態をとるのである。」(長谷部訳『資本論』Ⅰ、66～7 頁、原典、77～8 頁)

現行版では、簡単な価値形態の分析で、等価形態を取り上げたところですでに、「上衣もまた、それの等価形態を、直接的な交換可能性というそれの属性を、重さがあるとか保温するとかいうそれの属性と同じように、生まれながらにもつかに見える。ここから等価形態の謎性が生ずる」(長谷部訳、54 頁) と述べられていた。つまり、価

値関係の内部でのみ、上着に直接交換可能性という等価物としての社会的属性が与えられるのに、そのようには見えず、直接交換可能性という社会的力が、上着そのものの自然属性に見える、ということだった。商品の謎的性格とはこの等価形態の謎性から発生している。

人々が無意識のうちでの本能的行為として自らの生産物を商品として市場に出すときに、これが、自然物である労働生産物を、商品という物象に転化させ、そうすることで自らの私的所有物を社会に通用させて交換できる仕組みを作ることに加担しているのであり、これはまさしく人々そのものの一定の社会関係（物象を媒介とした生産関係）なのであるが、それが、当事者たちにとっては、物と物との関係として認識されているのだ。この事態が物化であり、商品の神秘性や、謎的性格や、物神性といった事柄は、みな同じことを指しているのであるが、物象の人格化が人々にもたらす意識において、物象が単なる物として認識される事態を指し、したがってマルクスは物化という用語でこの事態を示しているのである。

以上の解読を踏まえて、マルクスの物象化論と物化論について簡単にまとめておこう。初版本文価値形態論は商品が物象として成立している仕組みの解明だった。そして初版物神性論は、この物象として成立している商品を現実に商品として扱う所有者の意識を解明し、それが、商品を物象として扱うというこの行為についての意味を理解した意識ではなくて、この行為の意味は意識されてはいず、社会的力をもった商品の物象としての力が、物それ自体の属性と意識されて、単なる物を扱っているように考えられているということの暴露だった。無意識のうちでの本能的行為とは、人という生物種に属する本能から生じる行為という意味ではなくて、物を商品とする行為において、物それ自体の属性に順応しているという意識が生じているという事態のことだ。そしてこの物象化の問題は、第 1 章で解読した交換過程論での、商品の本性に意志を宿すことで貨幣を生成するという問題提起に繋がって行く。

このように読むことで、マルクスは、商品からの貨幣の生成が、単に歴史的な一回行為としてではなく、毎日商品市場に商品が投入される都度貨幣が生成される行為が繰り返され、貨幣はそういうものとして日比刻々再生産されているものであり、だからこれの廃絶も可能である、というメッセージを発していることが分かる。

そして物象化を単に物化としてしか把握せず、これを人間の認識の問題に還元してしまうような『資本論』の理解が、商品の価値形態の解明へと進めないのも当然のことだ。商品の価値形態を物象の生成のメカニズムと捉えることで、物を物象として生成させることに日々加担している私たちが、どのようにして脱物象化を成し遂げていけるのかという課題も見えてくるのである。

第 3 章　投機・信用資本主義の段階と 99%が掲げる反資本主義の思想的課題

『ASSB』20 巻 3 号、「社会運動の視点から見た反・脱原発運動」第 1 章　99%の思想的課題、と重複のため省略します。

文献（自著）
著書　榎原　均『資本論の復権』（鹿砦社、1978 年）
　　榎原　均『価値形態・物象化・物神性』（資本論研究会、1990 年）
論文「大阪自由大学資本論講義（第 1 回）」（『ASSB』誌、第 20 巻第 1 号、2012 年所収、）
「大阪自由大学資本論講義（第 2 回）」（『ASSB』誌、第 20 巻第 2 号、2012 年所収、）
「ソ連における階級の形成」（『赤報』連載論文）

ポストンの「マルクス理論の新地平」

1．はじめに

モイシュ・ポストンの『時間・労働・支配―マルクス理論の新地平』（筑摩書房）が翻訳されて話題になっている。原書は 1993 年に出ていて、ソ連・東欧崩壊後であり、その崩壊の総括としての意義をもっている。私自身のソ連の行き詰まりの総括は 1988 年に着想し、『価値形態・物象化・物神性』にまとめたのは 1990 年のことだった。自身の経験からしておそらく既に始まっていた湾岸戦争のどさくさで、せっかくの問題提起もあまり議論されなかったのではないかと思われる。リーマンショック以降のマルクスブームでマルクス主義の再検討が始まっていて、私自身の問題提起もルネサンス研究所などでやっと議論されるようになってきたが、ポストンの問題提起も議論の土壌が生まれてきているのだろう。

ポストンの伝統的マルクス主義への批判は根底的で歯切れがよい。それはプロレタリアートが革命の主体であることを否定し、プロレタリアートの独裁による社会革命を否定し、搾取に基づく階級闘争をすら否定している。そして、価値の廃絶と労働そのものの否定を提案している。日本語版序文では次のように述べられている。

「私が示そうとしているのは、伝統的マルクス主義による解釈とは反対に、その最も根本的なレベルにおいてマルクスの批判理論は、労働を肯定する立場からなされる、階級搾取の様式に対する批判ではない、ということだ。マルクスの批判理論は、もっと基本的なレベルで、独特な抽象的形態による支配の存在を明らかにし、それを分析するものである。この抽象的な支配は、非人格的な命令や強制力をもたらすが、この支配について、階級支配という観点から十全たる理解を得ることはできない。」（『時間・労働・支配』、11 頁）

ここで述べられているように、ポストンのマルクス解釈は、物象化論の立場に近い。この抽象的な支配についてポストンは次のようにその概略を述べている。

「本書が提示するマルクスの再解釈は、こうした労働と社会的媒介の特殊な形態を明るみに出し、それらが生みだす支配の諸形態、つまり商品や資本といったカテゴリーによって把握される形態は静的なものではなく、市場の観点からでは適切に概念化されえないということを示そうとしている。もっと言えば、そうした支配の諸形態は本質的に時間的なものであり、まさしく資本主義＝近代の核心をなす歴史的動態性を構成しているのである。ここでは支配は、時間による人間の支配という形態をとる。この枠組みにおいて労働は、批判の立脚点ではなく、批判の対象である。」（同書、11 頁）

ここまで読んでくれれば、ポストンの再解釈には『資本論』で展開されている商品の価値形態について何らかの応答があるのではないかと期待させる。しかし、この著書には価値形態の研究はなされておらず、商品や資本をせっかく「支配の形態」を把握しながらも、これでは再解釈もうまく行かないのではないかと思ってしまう。とすれ

ば、ポストンが、物象化論的立場からマルクスを再解釈しようとしながらも、なぜ価値形態論の解読に向かえなかったのか、そして、そのためにどのような問題に直面しているのか、さらには価値形態論の解読によってポストンの行き詰まりが解消されることなどについて批評してみよう。

2．ポストンの提起の大枠

ポストンの議論は単純で、結局は資本主義の矛盾について次のように把握することに尽きている。

「マルクスによれば、富の一形態としての価値の特徴をなすのは、価値が生産過程における直接的な人間労働の支出によって構成されているということ、価値が富の生産における決定的要因としての人間労働の支出に拘束され続けているということ、そして価値が時間的な次元を有するということである。価値とは、直接的労働時間の支出を表現し、またそれに基礎づけられた一つの社会的形態である。」（同書、55 頁）

つまり資本主義は諸資本の競争によって、個別資本は生産性を上昇させることが至上命題となり、したがって労働時間の節約が行われざるをえないのだが、ところが価値の唯一の源泉が労働であり、しかもこの労働時間は抽象的人間労働の支出として剰余価値の生産に預かっている。労働が一方で節約されかつ単純労働という生産にとってある種余計なものにされながら、しかし価値の生産という観点からは労働をないがしろにはできない。つまり労働の二重性をポストンは矛盾したものと捉えているのである。ここから生産力と生産関係との矛盾という伝統的マルクス主義の説への批判を次のように展開する。

「ここで明らかなようにマルクスは、資本主義の矛盾を工業的生産と価値との矛盾としては、すなわち、工業的生産と資本主義的な社会的諸関係との矛盾としては考えてはいなかった。むしろ彼は工業的生産を、価値によって形成されたものとして見た。工業的生産とは、『価値に基礎づけられた生産様式』なのである。」（同書、59 頁）

工業生産という生産力と、資本制的外皮との矛盾としてではなく、工業生産というシステムは資本が作り出したものであり、価値に基礎づけられた生産様式とみることで、ポストンは別のところでは、ソ連が無批判的に工業生産を土台に社会主義社会を建設しようとしたことを批判している。もっともマルクス自身は生産力と生産関係の矛盾については、生産の社会化と資本制的外皮との矛盾として設定しており、資本主義は生産の社会化に照応して資本制的外皮を社会化してきたという歴史的経過がある。

ところでポストンの革命の展望は、労働を批判の対象とすることで、価値の廃絶として提起され、それは具体的には労働の廃絶として展開されている。

「マルクスが価値を、分配のカテゴリーとしてだけでなく、歴史的に規定された特殊な生産様式のカテゴリーとしても扱ったということは――これは決定的に重要なことであるが――、価値を構成する労働は、超歴史的に存在しうるものとしての労働と同一視されるべきではない、ということを示唆している。むしろその労働は、資本主義の超克とともに実現されるのではなく廃絶されるであろうような、歴史的に特殊な形態なのである。」（同書、62 頁）

価値の廃絶や労働の廃絶といったことがどのような実践的展望をもたらすかについては大いに疑問があり、実際ポストン自身この本でそれをうまく展開できてはいない。とはいえ、資本主義における支配の特徴についてはそれなりに把握し、批判を試みている。

「マルクスの分析において、資本主義における社会支配は、その最も根本的なレベルにおいて、他の人間による人間の支配に存するのではなく、人間自身が構成する抽象的な社会構造による人間支配に存する。マルクスは、このような抽象的で構造的な支配形態――それは階級支配を包合しつつそれを超えて広がりゆく――を、商品と資本というカテゴリーによって把握しようとした。マルクスによると、この抽象的な支配は、資本主義における生産の目的ばかりでなく、その物質的形態をも規定する。マルクスの分析枠組みにおいて、資本主義の特徴をなす社会支配の形態は、究極的には私有財産に、すなわち剰余生産物と生産手段の資本家による所有に依拠しているのではない。むしろそれは、富が価値の形態を取ることそれ自体に、すなわち、生きた労働（労働者たち）に対して構造的に疎遠かつ支配的な力として屹立する社会的富の形態を取ることに基礎づけられているのである。」（同書、63 頁）

ポストンがここで述べている抽象的な社会構造による支配は、現在の人々が何らかの意味で承認せざるを得ない観点である。しかも、これを富が価値という形態を取ることへの批判として解明しようとしていることは大いに賛同すべきである。しかし、それが疎外論や認識の次元の問題提起に終わる危険性もある。ポストンはプロレタリアートは主体ではないといいつつ、ルカーチには影響を受けている。

ルカーチの物化論は、プロレタリアートが革命の主体となるべき論理を構築しようとしたものであり、商品の物神性がもたらす虚偽意識をどのようにして克服していくかという問題意識から組み立てられていた。ルカーチは人間労働の抽象化を商品との関連でつかみ、「商品に対象化された人間労働の抽象化という現象が生じる。」（『歴史と階級意識』、未来社、16 頁）と見た上で、さらにこれが生産に作用することについて次のように述べている。

「生産の機械化は主体を孤立化させて抽象的なアトムにするのであって、このアトムはもはや自己の労働行為では直接的・有機的に全体と結びつかず、むしろ彼らの編みこまれている機構の抽象的な法則性に媒介されて、たがいに結びついているのである。」（『歴史と階級意識』、21～2 頁）

ポストンの支配論がこのレベルの認識に終われば、それは物象化論への道を切り開くことができず、疎外論の緻密化といった、信念における革命に終わらざるをえない。そうなると、実践的な提起に繋がってはいかないだろう。

3．労働の把握における問題点

ポストンはまず労働を社会的媒介の活動を捉えている。

「資本主義における労働は、社会的な媒介を行なう活動として機能するのだから、直接的で社会的である。この社会性は、歴史的に比類のないものであり、資本主義における労働を他の社会における労働と区別し、資本主義的編制における社会的諸関係の性格を決定づけている。」（『時間・労働・支配』、92 頁）

あるいはこのようにも言っている。「労働そのものが、目に見えるような社会的諸関係に代わって、社会的媒介を構成するのである。・・・・・社会的媒介の活動としての労働の機能は、彼が『抽象的労働』と名づけるものである。」（同書、250 頁）

ポストンの労働の捉え方は、資本主義にあっては労働が社会的な媒介を行うから、労働が直接的に社会的なものとなると述べているが、しかしこれは疑問であり、マルクスは物神性のところで直接的に社会化された労働に言及しているが、これは資本主義の下での労働のことではない。資本主義においては労働が対象化されて商品となり、

この商品という形態において労働は相互に抽象化されるわけだから、労働は商品に媒介されてはじめて社会的なものとなっているのではないのか。

「マルクスの分析は、労働に媒介された社会的諸関係に対する批判であり、それは歴史的に現れつつある、ありうべき別種の社会的・政治的媒介という立場からなされている。・・・・マルクスの批判は、媒介そのものに対する批判ではなく媒介のある特殊な形態についての批判である」(93 頁)

ポストンはマルクスの『経済学批判要綱』から着想を得てこの特有の労働論を展開しているわけだが、このような労働論は『資本論』よりもむしろ『経済学批判』の商品論に近い。『要綱』でも『経済学批判』でも価値形態論は未展開であり、マルクスは『資本論』初版ではじめて価値形態の秘密と謎を解いた。ポストンはこの事実に無関心で、むしろ価値形態論以前のマルクスの労働論にこだわっている。

されに抽象的支配については次のように述べている。

「抽象的支配とは、商品に規定された労働に媒介された、社会的関係の抽象的で半ば自立した諸構造による人間支配であり、それこそマルクスが価値と資本というカテゴリーによって把握しようとするものである。」(211 頁)

ポストンのこの長大な著書の英語版はネットに出ていて、「商品に規定された労働」の原語は commodity - determined だが、この言葉が『資本論』英語版にあるのかどうか、後日確かめたいが、日本語訳からは商品が主語ではなくて、労働が主語になる。ポストンのこれまでの議論では明確に労働が社会的媒介の活動なのだから、労働が主語であるように訳すのは自然なのかもしれない。

「抽象的労働のカテゴリーが、特定の種類の労働や具体的労働一般を指すものではないことは、既に明らかであるだろう。それは生産活動としての『通常の』社会的機能に加えて、資本主義に特殊な、特異な労働の社会的機能を表現するのである。」(250～1 頁)

果たしてこのようなことが言えるだろうか。資本主義において社会的媒介をなすのは、労働の社会的機能ではなく、商品の社会的機能ではないのか。資本を主体と見なすなら、商品を主体と見なすべき。労働は対象化されて商品となることで主体化される。社会的媒介の機能は商品にある。

もちろんポストンも商品について言及してはいる。

「各生産者は諸々の商品を生産するが、それらの商品は特殊な使用価値であるのと同時に社会的媒介としても機能する。商品の社会的媒介としての機能は、その特殊な物質的形態から独立しており、それは全ての商品に共通である。」(252 頁)

ここでは労働ではなく、商品が社会的媒介の機能を持つとされている。しかしまた次のようにも言っている。

「労働（あるいはその生産物）はその質的な特殊性のために購買されるのだが、販売されるのは一般的手段としてであるという状況である。その結果として商品生産労働は、特殊――具体的労働、特定の使用価値を作り出す一定の活動として――であると同時に、抽象的労働、他者の財を獲得する手段として、社会的に一般的なものなのである。」(252 頁)

ポストンによれば、労働の二重性をなす、一方の抽象的人間労働が、それ自体で社会的媒介者となるのだから、商品に言及してはいても価値形態は不必要となる。しかし、抽象的人間労働それ自体は価値ではない、それは対象化されてそれ特有の形態（商品）を取ることで価値となる。ポストンの価値は形態を取ってはいない価値の実体たる抽象的人間労働のことで、これはひょっとして労働に応じた分配となってしまうのではないか。というのも、労働者が労働力を商品として売る場合、生産過程で商品を生産するが、同時に価値を生産し、この価値は他者の財を獲得するものとはならず、労働力の価値がそれになるということが説明できていない。もちろんポストンが、労働力の商品化と、賃金が労働力の価値であるということを知らないというわけではない。

ポストンは資本を論じる段となると、労働から商品への転換していく。

「資本家と賃労働者との階級対立はまた、商品によって構造化された社会的文脈において、必要や要求が理解され表現される固有の仕方に、すなわち、商品によって構造化された関係性に伴う社会的な自己理解と権利の概念に根差している。こうした自己把握は、自動的に生じるのではなく、歴史的に構成されている。さらにその内容は、単に偶然的なものではなく、商品に規定された社会的媒介の様式によって含意されている。」(507 頁)

従来は抽象的労働が社会的媒介の活動と看做されていたがここに至って商品が社会的媒介の形態とされている。活動としての労働が客体化されて商品になり、それが社会的媒介の形態となるという意味か？客体化させるのは一体何か。対象化された労働を商品として扱うことが社会的媒介の活動であり、それは無意識のうちに行われるのであって、労働が社会的媒介の活動であるわけではない。

とまれ、労働を社会的媒介の活動と見なし、これが資本主義による抽象的支配の根拠だと捉えたポストンは、革命をどのように展望しているのだろうか。最後にこれを見てみよう。　(以下次号)

後記

今回は中日社会主義フォーラムの文書の分量が多く、しかも従来の主張の焼き直しですので読者には申し訳ないですが、記録文書として収録させてください。これだけでいつものページ数になってしまいましたが、あとポストン論を追加しました。ポストンは最初の方は歯切れのいい伝統的マルクス主義の批判が続き、期待したのですが、資本主義における抽象的支配について論じようとしているにもかかわらず、当然にも踏まえるべき価値形態論には分け入っておらず、段々気持ちが切れていきました。読みにくいかもしれませんが、700 頁近い大部の書物『時間・労働・支配』(筑摩書房)の辛口の書評としてお読みください。なおページ数の関係で、4．革命の展望　は次号に回します。

前回ルネ研の活動を中心に編集しましたので、その後の活動について紹介しておきます。9 月 22 日には公開研究会を企画しました。＜世界を変えて生き残れ！　生命が収奪される時代－「知識資本主義」を打ち倒せ＞というテーマで、崎山政毅さんに報告してもらいました。報告は知識資本主義というものの実態的な分析が中心で、私が期待していた信用の問題については、詳しい報告はありませんでした。しかし知識資本主義の実情についての理解が進みました。

また、9 月 30 日にはＫＣＭの主催で、斉藤日出治さんに市民社会論について網羅的な報告をしていただきました。私は、本誌前号で提起したルネ研の今後の研究活動で、組織論の解明を挙げましたが、12 月にルネ研東西合同シンポジウムでそれについて報

告するよう要請されていて、斉藤さんのお話しを聞きながら、組織論への取っ掛かりについてずっと考えていて、結構考えが整理できました。次号には問題提起ができそうです。

あと、自治について提起している関係で、自治についての論客を探していて、カストリアディスに行き当たりました。江口幹『エコロジーから自治へ』（緑風出版）に紹介が出ていて調べたところ、『社会主義か野蛮か』をはじめ『想念が社会を創る』、『迷宮の岐路』Ⅰ～Ⅴ、がいずれも法政大学出版局から出ていました。図書館で借りてきて目次をざっと見た限りですが、1922年生まれで若くして共産主義運動に参加し、やがてソ連に幻滅して第4インターに加盟し、そこでもソ連労働者国家擁護に反対して、ソ連を官僚制資本主義とみなし、雑誌『社会主義か野蛮か』を発行して政治的発言を繰り返しますが、やがて哲学的思考に取り組み、沢山の著作を残します。しかし、社会主義批判の根底にあるのは自治社会の追及であり、これはずっと一貫しています。

ＫＣＭの研究会でも発言したのですが、私が2007年頃から共生型経済推進フォーラムで政策提言の活動を始めたときには、ヨーロッパ型のサードセクターの形成を展望し、社会的経済、社会的企業促進を課題としてきましたが、そしてそれはそれとして継続していくべきですが、私の問題意識としては、中国に行ったせいもあるのですが、サードセクターが育たないアジア型社会における施策として、サードセクターに限定せず、自治それ自体を公的セクターや私的セクターにおいても追及することが問われていると思うようになりました。このように考えるようになったのは、フクシマ原発事故以降の電力独占の解体が日程に上っていることと関係しています。これを自治という理念のヘゲモニーで実現していくことが、今の課題だと思うのです。

たとえば、映画「シェーナウの想い～自然エネルギー社会を子どもたちに～」（2008年ドイツ、カラー60分）にあるように、自分たちで電力会社を作ってしまうということもこれからは可能になるでしょう。また、発電所といっても、一切発電はしない節電発電所を設立するという手もあります。これは協同組合やNPOでもできる事で、そのための研究会を立ち上げたいと思っています。

そのような次第で、カストリアディスの提起を検討して、自治（労働者自主管理を含む）についての見解の整理をしてみたい。但しカストリアディスは自身が精神分析家でフロイトの精神分析に信をおいています。無意識について論じているのですが、それはフロイト説に依拠したものなので私には役に立たないのが残念です。

ルネサンス研究所では、10月20日（土）に、テーマ：「債務共和国の終焉」で市田良彦さんの報告による内部研究会が予定されています。この論文は『情況特別号』（10月末発行予定）掲載のもので、それを議論しようということになっています。ルネ研もやっと研究所らしい取組みが始まっています。

反原発運動の方は、10月21日に京都では恒例の反戦共同行動の集会とデモが企画されています。円山野外音楽堂で金子勝さんの講演があります。また、11月11日には東京での100万人行動に呼応して、大阪の関電本社前1万人行動が企画されつつあります。また、福島原発告訴団の呼びかけがなされ（11月15日締め切り）原発事故で誰一人刑事訴追されていない異常な状態への異議申し立てが始まります。

いろいろありますが、『資本論』講義のほうも準備して行きます。また80年代末に吹き込んだ講義のほうもテープ起こしが進み始め、この校正にも取り組んでいます。価値形態論研究の必要性を訴えていくために、『資本論』講義のほうは何とか著書にまとめたいと思っています。